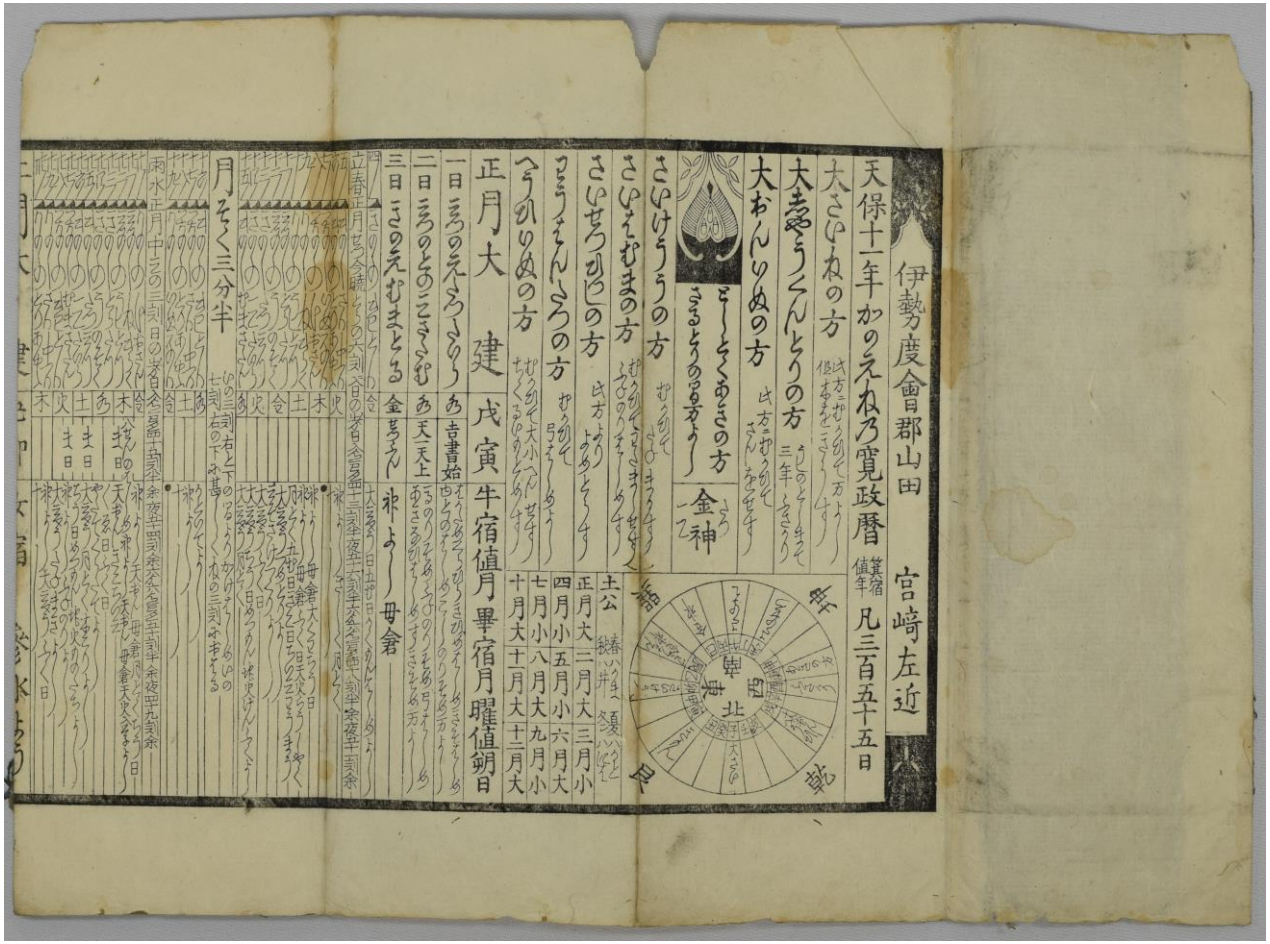
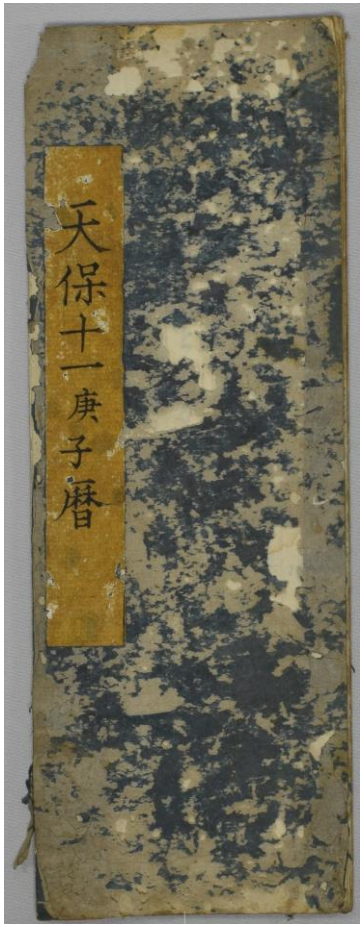
「今年は庚子（かのえね）」





【資料名】　庚子　天保十一年暦（鵜足郡土器村進藤家文書　１８７３）

【年代】　天保十年（一八四〇）出

【作成】　伊勢度会郡山田宮崎左近

【解説】

天保１１年（１８４０年）は、ちょうど１８０年前。

干支は、今年と同じ「庚子」である。

「庚子」とは何か。

今年の年賀状はねずみ尽くし。十二支のうち、子の年だからである。

近年では「干支」というと、十二支を指して言うことが多いが、本来は、十干（甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと））と、十二支（子（ね）・丑（うし）・寅（とら）・卯（う）・辰（たつ）・巳（み）・午（うま）・未（ひつじ）・申（さる）・酉（とり）・戌（いぬ）・亥（い））の組み合わせを「干支」という。全部で６０通りあり、「庚子」はその中のひとつだ。

はたして、１０×１２は１２０通りではないのか。

それぞれが毎年ひとつずつ進むので、どちらかの奇数番目と、どちらかの偶数番目は決して一緒にはならない。したがって、半分の６０通り、となる。

「還暦」という言葉をご存知の方も多いだろう。干支が６０年かけて一巡して、生年の干支に戻ることがめでたいとして、祝ったものである。昔は今よりも平均寿命が短く、６０歳で一区切りであったのだろう。さらに古くには４０歳から祝っていたともある。

だが、現代社会において６０歳は若い。７０歳の古稀、８０歳の傘寿はもちろん、近い将来、二度目の還暦を迎える人が現れるかも知れない。

また、昔の暦において、干支は月日にも用いられた。史料を見ると、日付の下にびっしりと干支が書き込まれている。左半分は現在のカレンダーと似ている部分もあり、なんとなくわかる。なじみがないのが右半分だ。

まず一番右に「伊勢度会郡山田　宮崎左近」とある。発行元の名だ。この暦は「伊勢暦」といい、全国でも有名で、一時は市場占有率が半数に上ったという。次に「天保十一年かのえね乃寛政暦　箕宿値年　凡三百五十五日」と続く。箕宿とは二十八宿のひとつ。

その後は、方位吉凶一覧が並ぶ。八将神や、歳徳神、金神の在する方角が干支で書かれていて、その性質によって、その方角でしてはいけないこと、したらいいことが書いてある。

金神は金運かな、とお思いの方。この方位は何をやっても大凶である。あらゆる行為において、金神の在する方位を犯した者とその周辺には破滅が訪れる、と恐れられている。今年の暦に見つけたときは、ご注意を。

このように、干支は年月日、方位、ひいては占いなど、暮らしに密接に関係していた。あなたも今年「庚子」の運勢を占ってみてはいかがだろうか。